



許されなくていい

芸能界にしがみつきたいギャル男

因果応報でパパ手籠めにされて

俺は色黒金髪のギャル男の見た目をした「アゲハ」という芸名のタレント。

いかにもチャラくて軽薄で無礼な陽キャで、身も蓋もない無情な正論パンチで相手を黙らせたり、突きつめられると困るような話に「なんでなんで！」としつこく食いささがったり、べつに毒舌を吐いているわけではないのだが「毒舌ギャル男」が代名詞に。

コンプライアンスがうるさい今の世で、ぎりぎりアウトにならない無節操な言動が受けて、そこそこ売れている。

このキャラは賞味期限があるから、一躍、有名になり稼ぐだけ稼いで、悠々自適な余生を送りたいところ。

そのために今の地位を安定させたくうえでステップアップしたく、今日

はテレビ局のお偉いさんと会食。

正直、時代遅れなバブリーなおっさんらと食事しても、退屈で不愉快なのだが、なんだかんだテレビ局の力は侮れず、揉み手ができるなら、いくらでもするに越したことはない。

「それにしても、こういう、どぎつい業界人とは、いつまで経っても肌があわないなあ・・・」とため息をついて、芸能界で唯一といっていい友人を思い浮かべた。

若手個性派俳優の華月凜だ。

幼いころから劇団所属をしてこつこつと芝居を学び、高校生になってメディア活動を開始。

経験の長さに裏打ちされた技術でもって、どんな役も別人のように演じ分け、なにより主人公を引き立たせるのが巧み。

どれだけ主演の俳優が大根だろうと、凜が共に芝居をすることで、実

力以上の魅力が引きだされると評判。

とあってイケメン俳優が群雄割拠する今の業界で、月並みな容姿ながら凛は重宝されて、主役を演じられずとも舞台にドラマに映画に引っぱりだこ。

売れっ子の部類にはいるとはいえ、本人はマイペースな芝居馬鹿だから、まったく業界に染まらず、我が道を突き進んでいた。

曲がったことが好きでないとあり、理不尽なことには真っ向から物申すため、そのせいで降板になったことも、すくなくないとか。俺が聞いた噂のひとつに、スポンサー助平親父撃退劇がある。

スポンサーの大手企業のお偉いさんがドラマの撮影現場に見学にきたとき、グラビアアイドルの女の子にロックオン。

「きみ初めてでしょ？足引っ張ってない？」「さっき二回も噛んだけ

ど？台本ちゃんと覚えてきたの？」と小馬鹿にしながら、肩をくっつけて腕を撫でたり腰に手を回したり。

今の時代、スポンサーを探すのが一苦労とあって「機嫌を損ねて撤退したらかなわん」と現場の人は見て見ぬふりをしていたところ、凜がつかつかとこの助平親父の元へいき、なんの一言もなく尻を驚掴みにしたらしい。

「なんだね、きみ！失礼だよ！」とそりゃあ先方は怒ったとはいえ「その失礼なことを、あなたも彼女にしているんですよ」と澄まし顔で返答。

「これでも分からないなら、股間をまさぐりましょうか」と触ろうとしたら助平親父はとんずらしたが、のちに報復として凜はクビにされたとか。

これが武勇伝として語られるだけでなく「空気の読めない危険人物だ

な」とキャスティングの判断材料にされるあたりが芸能界ならでは。正しいことをしても煙たがられるやりきれなさがあるとはいえ、凧の仕事量が極端に減っていないのが、まだ救い。

それにしても世間の常識が通用しない、魑魅魍魎のような人間が跋扈する業界では、さぞ生きにくいだろうが、本人曰く「食っていきけるだけ芝居で稼げれば、あとはどうでもいい」と割りきっているから、なんと格好よく、羨ましいところ。

社会人から芸能界にとびこんだ俺も、どこか業界には馴染めないままでいて、その点ではもともと凧と通じるものがあつたのだろう。

ただ浮わついたタレントと地に足をつけた俳優とではまるで縁がなく、もちろん共演することがなかったものの、俺は見つけてしまったのだ。テレビ局の廊下を歩いていて、たまたま凧とすれちがったとき、リュックに好きなライトノベルのグッズ、キーホルダーが揺れているのを。

思わず足を止めて「ゆかちん・・！」と呼んでしまい、ふりかえった凜としばし無言で見つめあつたのが、はじめての出会いだった。

テレビでは鬱陶しいほど陽キャなギャル男としてふるまっているも、プライベートの俺は陰キャのおたくだ。

凜にしても硬派な役者に見えて、けっこうおたく気質なラブコメライトノベル愛好家だったらしい。

仕事場へ持っていくリュックにキーホルダーをつけていたくらいだから、べつに凜は隠すつもりがなかったようだが、俺はキャラ的にも時代的にも秘密にせざるを得なかった。

ギャップ萌が狙えなくもないからキャラ的なのとはともかく、時代的にはカミングアウトすれば致命的。

というのも「ハーレムものラブコメ」好きなおたくの男が通り魔になり殺人を犯したから。

べつに「ハーレムもののラブコメ」が好きなせいで犯罪に走ったわけではないだろうとはいえ、マスコミやネット民が関連づけて叩き、そのイメージが世間に定着してしまい。

つまりそういった類いの創作物が好きな人間イコール犯罪予備軍と見られるようになったのだ。

「毒舌ギャル男」なんて、あまり響きのよくないキャラにしてけっこう好感度がある俺が、犯罪予備軍のレッテルを貼られたら、芸能界から追放されることまちがいなし。

そう考えて警戒していたものの、平然とキーホルダーなどのグッズを身につけ、仕事場で堂々とライトノベルを読む凜には、仕事の依頼が途絶えることはない。

二人のちがいは、秀でている一芸があるかどうか、だろう。誇れる一芸があるうえに「食っていけるだけ芝居で稼げればいい」と

いう心持ちでいるから、凛は必要以上に、まわりの目や評価、好感度などを気にしないでもいいわけだ。

といって芸能界にしがみつき見苦しくもがいている俺を見下したり、嘲笑ったり、責めたりはしない。

まわりに知られたくないという俺の意思を尊重し、人目があるところでは絶対におたくトークをしないし、完全に他人のふりをしてくれる。友人関係を秘密にしていることも、おかげで会うのに一苦労するのにも文句をつけず、いざ顔をあわせたら仕事の話は一切しないで、ライトノベル愛を語りあうのに興じてくれる最高のおたく友だち。

名の知れた俳優ながら、ふだんからモラルの高い常識人とあり、一般人であり口の固い友だちに会っているように心安く話ができたもので。

芸能界では浮世離れた人が多く、もともと社会性があつたはずが、染まってしまうと非常識モンスターに化ける場合もすくなくない。

昔よりましとはいえ、まだまだハラスメントが当たり前に横行しているほど、この世界は世間ずれをしているのだ。

非常識代表のような「毒舌ギャル男」のキャラで売りながら、染まりきれずに迷い悩み葛藤することがままある俺だけに、いわゆる業界人とのつきあいは、ひどく苦手。

それでも熾烈な競争社会で生きのこり、のしあがってくには人脈を築かなければならず、日々、胃をきりきりさせてパーリピーポーに混ざっているだけに、どれだけ凜との交流が癒しになっていたか。凜がいない今、そのことを痛切に思う。

会食をしているこの場所は、料亭の離れを貸しきりにしたもの。秘匿性が高く、本館からは遠くて、叫んでも声は届かいえ、従業員

がお節介にも「もし酔いづれましたら隣の間布団をしいてあるの
で、そちらへ」とお膳立てをしたものだから、おあつらえむきな「ヤ
リ目」部屋のよう。

さすがに歩くハラスメントのようなバブル世代でも、不同意で俺を布
団に押し倒すことはないだろうが、凜の一件を考えると「いやいやま
さか！」と笑いとはすことはできない。

油断することなく慎重にふるまい、あまり酒に口をつけなかったはず
が、気がつけば、全身を火照らせて息を切らし「ギャル男くーん、こ
っちのほうはお盛んなの？」と太ももを撫であげられ「ああ・・だめ
っ・・」と肩を震わせてかすかに喘ぎを。

両隣にいるおっさんは密着して熱い吐息を吹きかけ体をまさぐり、向
かい側の三人は鼻の下を伸ばしてにやつき、舐めるような視線を這わ
せてくる。

「これは・・・やばい雰囲気だ・・・！」と背筋を震わせ、流れを変え
るか、誤魔化して逃げるかしたところ、乳首に触れそうで触れな
かったり、足の付け根に指を滑らせたり、際どいところを撫でてくるの
に「あっ・・・んう・・・ふうう・・・」と弱々しく鳴くばかり。

酒に薬を盛られたのか、おっさんに触られて体をくねらせ、悩ましく
喘ぐギャル男なんて洒落にならない。

痛いほどズボンは張りつめて湿っているし、おっさんどもの固いのが
太ももに擦りつけられて「はう、やだっ・・・おっきい♥」と舌足らず
な喘ぎを漏らしてしまうし。

「会食を台なしにしても逃げない！」と焦る一方で、焦らすよう
に触られて、視線で舐め回され「やっ、やあ・・・やめてっ、くださ
あ・・・」と物欲しげに腰をふってしまふ。

ギャル男にあるまじき、みっともない痴態を笑い、右のおっさんが囁
いたことには「パパって呼んだら、気もちよくしてあげよう♥」と。

かっ顔を熱くして「ふざけんな！」と怒鳴りたいところ、甘い毒が回っている体は抗えないで「んっ・・はあ・・パパああ♥」と令和のチャラチャライケイケギャル男にして、幼児が甘えるような声を。

とたんに服越しに乳首をつねられ、もう片方を弾かれ、ズボンのもっこりを二人に握りしめられ猛烈シコシコ、両側から舌を耳に突っこまれて「ひゃああ♥だめっ、パパあ、そんな、一氣にいい♥」とお漏らしをどっぷりと溢れさせる。

